

日本の近現代史から何を学ぶか

― 白井聡の『国体論 菊と星条旗』
をめぐって



梶原 宣俊

一、はじめに

― 国体論の衝撃と平成の終焉

平成三〇年の六月、白井聡の『国体論 菊と星条旗』を読んで衝撃を受けた。私は、昭和二十一年の六月生まれで、大学生のころから、自分が生まれる一〇か月前までであった悲惨な大戦争のことが気になり、近現代史の勉強を始めた。その過程で、戦後の詩人・思想家吉本隆明に出会い、共感を覚えその著作をすべて読んできた。吉本は戦前、軍国少年として

戦争体制に丸ごとからめとられたことを戦後、徹底的に反省し敗戦（敗北）体験を深化させることによって、独自の戦後思想を構築してきた。私はその難解な思想を少しでも理解したいと思い、二十数年格闘し、平成一六年、五八歳のときに『吉本隆明論―戦争体験の思想』（新風舎）を自費出版した。吉本が戦争体験から体得した思想を、少年期青年期の自己形成も含め明らかにし、三つの思想として論じた。それが、大衆の思想（大衆自立主義）、国家の思想（共同幻想）、体験の思想（体験実感主義）である。

吉本は二〇一二年、「第二の敗戦期」（春秋社）で、日本は初めから独立を放棄していると指摘していた。その吉本も二〇一二年に没して以来、久しぶりに出会った魅力的な人物が白井聡である。白井は、一九七七年生まれの若手新進気鋭の学者評論家として『永続敗

戦論―戦後日本の核心』(二〇一六講談社)で注目を浴びてきた。

白井は、この書で、戦後日本の特殊な対米従属の在り方を解明し、敗北が持つ意味を曖昧化すること、敗戦の否認を続けるために際限なく米国に従属を続ける親米保守派支配体制を「永続敗戦レジーム」と呼んだ。

吉本は自らの敗戦・敗北体験にこだわり続け、白井は、戦後生まれとして敗戦、敗北の歴史にこだわり続けているのである。そして、今回は「国体」というキイ概念を用いて、明治から現代までの歴史を明快に分析している。私は「国体」という言葉は、戦前までのもので、現在では死語だと考えていたので意外な思いで読み始めた。しかし、読み進んでいくと現在にいたる近現代の歴史が生き生きと蘇り、あらためて近現代史を学ぶ大切さを痛感した。白井は「現代日本の入り込んだ奇怪な

逼塞状態を分析・説明することのできる唯一の概念が国体である」と述べ、菊と星条旗の結合を「戦後の国体の本質」として、「戦後日本の特異な対米従属が構造化される必然性の核心に位置するもの」として分析している。

私は、これまで漠然と対米従属をとらえ、肯定と批判が混在していた。白井は「国体の歴史」を戦前と戦後の二度にわたる「形成・発展・崩壊」の過程としてわかりやすく論じている。

そこで、彼の「国体論」を契機として、再度私なりに近現代史を読み解き、同時に改めて自らの体験的戦後史を振り返ってみたい。

二、白井聡「国体論 菊と星条旗」の概

要

白井は、国体論を今上天皇のお言葉から始めている。

二〇一六年八月八日、テレビで今上天皇は

生前退位を表明された。

白井はこれに衝撃を受ける。私は、白井ほかに衝撃を感じなかったが、今なぜ「退位なのかいぶかしく感じていた。

白井はお言葉の背景を、安倍保守政権の改憲問題や天皇は「祈っているだけでよい」という「日本会議」の発言に求めている。安倍政権は天皇の決断・発言に対して、宮内庁長官を更迭し辞任に追い込んだ。天皇は、これまでの生き方を全否定する内容に強い不満を持たれたという。

白井は、お言葉の裏に、戦後民主主義の破壊・空洞化に対する危機感と象徴天皇制の危機を読み取る。今上天皇は、象徴としての役割を果たすこととは、「全身全霊をもって国民の平安を祈り、戦争や災害に傷ついた人々や社会的弱者を励ますために東奔西走しなければならぬ」と考えておられる。この考えは、

私たち国民もおそらく同じ考えであり、私も、天皇の沖繩訪問等で、あの敗戦の犠牲者に対する深い思いを感じ取ってきた。国民が戦争体験を風化させる中で、天皇は戦争体験にこだわり続けている姿に感銘を受けてきた。それを、「祈るだけでよい」などという考えが保守自民党にあったとは驚きである。

白井はさらに、親米保守支配層にとって精神的権威は天皇からアメリカにスライドしていると指摘している。そして最後に「世界史



白井聡著「国体論 菊と星条旗」
(2018年、集英社)

上でも稀な、途轍もなく奇妙な敗戦、すなわちどのような敗北を喫しているのか敗者自身が自覚できないことよってそこから脱出できなくなるような異常な敗北を経験していることが表面してきた」と、「永続敗戦論」以来の主張を述べている。

もともと私は戦後生まれで、天皇という存在はあまり意識してこなかった。美智子妃との結婚式も外国のテレビのように見ていた。天皇制はあってもなくてもどっちでもよいと考えてきた。ただ、天皇が災害や、沖縄をはじめとする戦争の爪痕を訪問され、戦争と敗戦体験を忘れずに大事にされ続けておられることは印象的であった。

大学生から、近現代史を学ぶ過程で、日本人にとって「天皇(制)」とは一体何なのか、敗戦時に死守しようとした「国体護持」とは一体何なのかを多少考え始めた。

白井は、天皇のお言葉を契機として、すでに死語となってしまう「国体」という概念をよみがえらせ、戦後も形を変えて現在まで生きていることを、近現代史を踏まえて論証する。

近現代史を、前半後半に分け、さらにそれぞれを三期(国体の形成期・国体の相対的安定期・国体の崩壊期)に分け一五〇年の歴史を反復する国体の歴史としてわかりやすく年表化し論じている。

白井は近代前半、明治維新から敗戦までの七七年を三期に分けている。

第一期(明治維新から一九一二年明治天皇没まで)を天皇に統帥権を与え、天皇絶対主義、「天皇の国民」という国体の形成期、第二期(一九一三年の大正政変から一九二八年三・一五事件、張作霖爆殺事件まで)を「天皇なき」国体の相対的安定期、第三期(一九

三一年満州事変から一九四五年敗戦まで)を「国体の崩壊期」として論じている。そして、これをそのまま戦後の歴史にも当てはめているのが白井の慧眼、新しさである。その視点、前著からの主張である、米国主導、米国追従による象徴天皇制の存続である。米国は象徴という形で天皇制を残した方が統治しやすいと考え、天皇の戦争責任を不問に付し、新憲法を作成した。日本国民は、天皇の戦争責任を問うことなく、悲惨な戦争はもういやだと痛感していたから、この戦力を放棄した平和憲法を支持した。白井の洞察は、日本の支配層が米国追従により「敗戦」の事実を緩和してきたという点である。かくして、親米保守派(自民党)が戦後政治を支配することになった。この「親米保守」と「反米革新」の対立というねじれ現象についてはすでに、加藤典洋が一九九六年に「敗戦後論」(講談社)

で指摘していたことである。国体の崩壊と平和民主主義は左翼革新の支持することだから、本来、「親米革新」であるべきだし、国体護持派である右翼保守は「反米保守」であるべきだったのにねじれている。さらに、ジョン・ダワーも「敗北を抱きしめて」上・下 岩波書店(二〇〇一)で、戦後社会の矛盾とねじれは、日米合作、共犯であったことを論証し、アメリカが天皇制と官僚制を利用して強権的に民主革命を行ったことを指摘していた。

この複雑なねじれが、戦後日本の不可解さであり、白井が「永続敗戦レジーム」と呼び、今回の「国体論」につながっている。日本人が敗戦の事実を直視し、その教訓をいかしてこなかったためにいまだに敗戦が続いているというのが白井の逆説的表現「永続敗戦論」である。国体論は、その延長線上にあり、戦後三期に分けて論じている。同じ国体では

紛らわしいので、戦後は「新国体」として表記した。

第一期は一九四五年の敗戦から一九七五年の連続企業爆破事件までで米国占領が終わり、米国支配の象徴天皇制がスタートし、六〇年安保闘争を弾圧し、高度経済成長を遂げた時期である。

白井は、この「新国体の形成期」を「アメリカの日本」と称し、明治期の「天皇の国民」と対比させた。国民の安保反対闘争が敗北し、米国と親米政府が支配権を確立した時期である。

第二期は一九七六年のロッキード事件から一九九三年のバブル崩壊までで、「新国体の相対的安定期」で「アメリカなき日本」と名付けた。日本が「ジャパンアズナンバーワン」とおだてられながら、バブル崩壊に突き進んだ時期である。

第三期は一九九五年の阪神淡路大震災、オウム真理教事件から二〇一九年現在までである。「新国体の不安定期、崩壊期」と称し、「日本のアメリカ」と呼んでいる。この「日本のアメリカ」という意味が多少わかりにくい。

白井は、「国体の弁証法」と称して、「日本の助けによって偉大であり続けるアメリカ」の時期であると主張しているが、私には、日本の助けによってアメリカが偉大であり続けたとは思われない。さらに、「日本は独立国ではなく、そうありたいという意思すら持つておらず、かつそのような現状を否認している」。「本物の奴隷とは、奴隷である状態をこの上なく素晴らしいものと考え、自らが奴隷であることを否認する奴隷である」と述べている。なんとも辛辣な表現である。かくして「菊と星条旗」の統合による戦後の支配体制が、現在崩壊の危機にあると白井は指摘しているが、

私には多少希望的観測のように思える。戦後日本を米国支配と象徴天皇制の合体である「新国体」と喝破した慧眼には敬服するが、それが崩壊期にあるとはとても思えない。

米国のフーバー研究所で働き、GHQの秘密資料を分析し、ネットで情報発信を続けている西鋭夫もまた、GHQ・マッカーサーが敗戦後の日本をアメリカの都合の良い国にするために、日本人の憲法草案を無視してアメリカの憲法草案を採用したことを指摘している。そして欧米国家が、天皇の戦争犯罪の責任者として処刑することを主張する中で、天皇制を維持した方が占領政策を実行しやすいと考え、東京裁判から除外したという。さらに現在、米国防長官大統領は世界の憲兵であることを放棄し、アメリカファーストを実行しようとしている。世界はそれに翻弄されつつある。その米国に日本の安倍政権は北朝

鮮問題をはじめ、憲法改正（自衛隊明記）等ますます米国追従を深めようとしていると指摘している。

私は、たとえ米国主導の憲法、戦後体制であろうと、良いものは育て良くないものは、国民の力で変えていくべきだと思う。また、政府が天皇のお言葉を白井のように深く理解することはないだろう。そうして「象徴天皇制」だけはこれまで通り存続していくだろう。第三期は、「新国体の崩壊」どころか更なる強化を目指しているように思える。白井は、今上天皇のお言葉を過大評価しているようにも思える。ただし、その「新国体の強化」が崩壊を内包しているとは言えるかもしれない。

前半の国体崩壊は敗戦によるものであった。新国体の崩壊はどのようにしておこるのだろうか。天皇の「お言葉」か、安倍の「憲法改正」か、米国のモンロー主義か。いずれ

にしても日本世界の未来はまだ混沌としてい
る。この混沌と混乱を「新国体の崩壊」の前
兆とみることは可能であろう。

二〇一九年五月、新天皇が即位し、平成が
終わり、令和となった。

今上天皇は、昭和天皇の遺志を良く継ぎ、
敗戦体験を最も深く体現して平成を生きてこ
られたように思える。新天皇が、どこまで父
の思いを引き継ぎ敗戦体験を風化させないよ
う行動されるか注目したいが、私の方が先に
あの世に行くだろう。

私は、今後、日米安保条約、とりわけ日米
地位協定の改定により対等な日米関係を構築
し、「ノーといえる日本」になることを望んで
いる。さらに、敗戦体験の総括を政府も国民
も徹底し、金と経済優先の社会から、「小さな
政府」を実現することにより支出を大幅に削
減し、財政赤字を解消しながら、真の民主主

義（国民の、国民による、国民のための国家）
実現に向けて、国民一人ひとりが努力し発言
行動し続けることが大事ではないかと考えて
いる。それにはまだまだ時間がかかるという
のが実感である。

三、私の戦後体験と戦後史

最期に以上の国体論を踏まえながら、私自
身の戦後体験を改めて振り返り、平凡な一市
民がどのように戦後を生きてきたかを確認し
てみたい。

第一期 「アメリカの日本」「新国体の形
成期」一九四五年～一九七五年（一九歳まで）
「アメリカに憧れ、挫折し、批判的自立精
神を養う」

私は一九四六年六月五日、福岡県北九州市
で生まれた。

父は、農家の長男であったが、農業に見切

りをつけ、機械の勉強をして麻生炭鉱につとめていた。転勤が多く、小学校は四回転校した。敗戦も米国占領も知らず、戦後の貧しさは質素な食事であったが、食べるものがないということはなかった。小学三年の時、長崎県北松浦郡の海辺の小学校に転校したとき、クラスの半分の子供たちは弁当もなく裸足で通学していた。給食がはじまるのは福岡県粕屋郡の小学五年になってからである。

5年6年生は、ある程度自己が確立し始める時期で、生涯を左右する時期のように思える。ラジオで米軍板付基地の放送をよく聞いた。米軍の基地がなぜあるかもわからず、なめらかな英語とアメリカ音楽に憧れた。プレスリーやポールアンカ、ニールセダカが好きだった。日本が戦争に負けて米国に占領されていたことなど全く知らなかった。米軍基地があることにも何の疑問も持たなかった。私

は、図書館係になり、毎日図書館で本を読むのが楽しみであった。漫画を卒業し、偉人伝やシャーロックホームズの本に熱中した。

中学生になると英語クラブにはいり、英語を一生懸命勉強した。

好きで得意な科目は、英語、国語、社会で、これは高校大学と生涯続いている。美智子妃の盛大な結婚式も何も考えずにテレビで見ていた。

高校でも英語クラブに入り、2年3年の文化祭で英語劇をやった。シェークスピアの「ベニスの商人」と「ハムレット」である。また、米軍基地の家庭を訪問し、アメリカの豊かさに驚き憧れた。これらは高校最大の充実した思い出である。

当時まだ米国留学は極めて少数であったが、AFS という高校生の留学制度があり、クラブの先輩が二人も留学していた。

私も留学したいと思い、親に相談すると猛反対された。それから私の遅すぎる反抗期が始まった。それまで私は親の言うことを素直に聞くいわゆる「いい子」だったが、すべてに反抗するようになった。同時に英語や、米国への憧れが衰退していった。

大学は親の進める地元の大学を嫌い、熊本大学に進学した。家族から離れ、一人暮らしがしたかったからである。自立の始まりであった。

大学二年のとき、吉本隆明の「擬制の終焉」に出会い、近現代史や戦争の歴史に関心を持ち勉強し始めた。初めて政治や社会、天皇制について考え始めた。

セツルメントクラブに入り、水俣の開拓部落の地域奉仕活動に熱中した。また学生自治会に入り、学生会館自治活動や大学改革運動に参加した。初めての「政治の季節」であっ

た。しかし、何となく大学や学生生活、社会への漠然とした不満があっただけである。

一九六九年大学四年のとき、全国で大学紛争が吹き荒れた。バリケード封鎖で授業がなかったので、私は休学して憧れの東京に行った。私はすでに学生運動のセクト争いや抽象的議論等に嫌気がさしていた。東京で日雇労働や塾のバイトをしながら演劇の勉強をした。高校の時の演劇体験が忘れられなかったからである。翌年、復学すると嘘のように学内は静かであった。同級生たちはみんな卒業していた。授業も単位もないのに、政府は特例で全員卒業させたのである。支配者の本質を垣間見た経験である。七十年安保にも、天皇にもあまり関心がなかった。関心は、今後どんな仕事をしながら生きていくかであった。

一九七一年、東工大教授であった川喜田二郎が退職して、大学改革運動である「移動大

学運動」を開始した。私は、それに深く魅かれ、復帰前の沖縄で開催された二週間の移動大学に参加し、川喜田先生とKJ法に出会った。この出会いはその後の私の人生に大きな影響を与えた。有名な文化人類学者であった先生は、古武士のような風格をもち、アメリカに批判的で、日本人の創造性開発に強い関心を有しておられた。

卒業後、私は書くことが好きなので福岡の新聞社に就職していたが、広島で移動大学を開催するのでプロジェクトリーダーをやってほしいという依頼があった。私は一週間悩んだ末、退職して広島に行った。大学改革運動とKJ法、川喜田先生に魅せられたからである。広島で「KJ法研究会」を組織し、宮島で無事に移動大学を成功させた。この時、全面的に物心両面で協力支援してくれたのが、広島YMCA総主事の相原和光氏であった。

相原さんは、京都大学出身で官僚をめざし、満州で働き、敗戦を迎えロシアに抑留された経験を持っておられた。抑留体験で、軍の指導者たちが容易に転向していく姿を見て官僚の道を捨て、帰国後日本YMCA同盟に就職され、広島に来られた方である。平和運動に信念を持った方で、私はこの二人の方に大きな影響を受けた。出会いが人生を変える。私はYMCAに就職し、定年まで働くことになった。

一九七二年、廃校となった小学校を、青少年や社会人の研修センターとして蘇らせるために、経営と企業内教育に尽力し、発展させた。KJ法がブームとなり、大いに役立った。時代は高度成長経済で、企業は社員教育、人材育成に尽力した時代である。アメリカからも多くの経営、教育手法が日本に紹介された。私も多くの手法を学んだが、共感したのは

ボブ・コンクリンの「A I A」(心の冒険)という生涯教育プログラムだけであった。

一九七三年、オイルショックを経験し、トイレットペーパーを買いあさった。

この時期は、子供から青年にかけて、アメリカに憧れ、挫折し、様々な出会いから、歴史や社会について考え、批判的精神や自立精神を養うことができ、将来の方向が決まった時代であった。

第二期「アメリカなき日本」「新国体の相対的安定期」一九七六年〜一九九三年(三〇歳〜四七歳)

「アメリカに学び、世界と交流し、平和と民主主義を考え、仕事に熱中する」

一九七六年、ロッキード事件が起こり、翌年には「ジャパンアズナンバーワン」が話題を呼び、中国の改革開放が進み、米国資産の

買収が始まる中で、私は時代の大きな変化を感じ取っていた。

一九八二年、私は時代の変化を先取りするため相原総主事とともに、初めてアメリカを訪問し、パソコン事情を視察した。アメリカの大きさ、先進的科に驚いた。私は、「YMC A総合開発研究所」の開設を相原総主事に提案し、承認された。高度情報社会の到来を予測し、パソコンや、NTTのデータベース端末を導入し、「情報喫茶アスキス」を立ち上げた。ネットカフェの先駆けで、NHKの取材を受けた。IN通信社から出版の依頼が来て「情報喫茶アスキスからの発想―高度情報社会を生き抜く法」を初めて出版した。また「WAVE」という未来を読み解く情報誌を年六回十五年間、発行し続けた。IICという異業種交流会も立ち上げた。

一九八六年からは「国際ビジネス専門学

校」の担当になり、私は英国と中国に姉妹校縁組をして交流を深めた。私は、専修学校法を研究し、新しい時代を切り開く実践的職業教育のあるべき姿を「専門学校教育論―その理論と方法」にまとめ出版した。(学文社 一九九三)

この経験が、「キャリア(職業)教育」への関心を深め、先進的なアメリカのキャリア教育を学び、退職後、大学院で学び、キャリアアコンサルタントとして活動することにつながった。

一九八九年、昭和天皇の崩御により時代は平成へと変わり、世の中はバブル景気に沸いていた。

一九九一年には冷戦が終結し、一九九二年にはバブルが崩壊し一九九三年には、三島由紀夫が自衛隊に殴り込み自刃した。

私は三島にあまり関心がなかったが、その

壮絶な日本の危機感には衝撃を受けた。

この時期を、白井は「アメリカなき日本」と呼んだが、私個人にとっては、アメリカの偉大さを体感しアメリカに学び、世界を知り、仕事に熱中した最盛期であった。アメリカなき日本というよりは、私にとっては「アメリカの内在本化、潜在化」の時期であったと思われる。

第三期「日本のアメリカ」「新国体の崩壊期」一九九四年～二〇一八年現在(四八歳～七二歳)

(アメリカを相対化し、日本の伝統文化に目覚め、地域活動や歴史、キャリア教育に熱中する)

一九九四年、私は日本語学校を兼務するようになり、留学生教育に力を入れるようになる。中国に学生募集のため何度も訪問し、交

流が深まり、中国の歴史と偉大さに感銘を受けた。私は「日本事情」の授業を担当し、日本の歴史文化風習を教えた。

一九九五年、阪神淡路大震災が起こり、私はたまたま大阪出張中で激しい揺れを経験した。オウム真理教事件が起こり衝撃を受けた。一九九八年、福山YMCAに転勤を命じられた。

この六年間は、私が日本人としての自覚を深め、その歴史、伝統文化芸能に強い関心を持った時期である。

まず、福山在住の喜多流能楽師大島政允に出会い、謡曲を習い始めた。

それを契機に、人形浄瑠璃、新内節、長唄、小唄、端唄、浪曲等の魅力にひかれ、CDを買ってきて独学を始めた。着物の良さに目覚め、「着物で日本文化を語る会」を始めた。これが、後年出水での「着物で出水武家屋敷を

歩こう会」につながっていった。

仕事は、館長だったので体育、専門学校、日本語学校、予備校、国際交流等幅広い業務であった。予備校が衰退し、将来を見据えて廃校にして代わりに「デイサービスセンター」をオープンさせた。

福山での六年間は、日本人の自覚を深め、伝統芸能文化に心酔した時期であった。

二〇〇一年米国同時多発テロをテレビで見ながら衝撃を受けた。

二〇〇三年、福岡YMCAの理事長が来られ、総主事として来てほしいと頼まれ、私は広島を退職し福岡へと向かった。

福岡YMCAは歴史も古く、大都市にもかかわらず、小規模なYMCAであった。理由は、トップリーダーシップと内部体制の確立が不十分であるに気づき、私は大胆な改革に着手した。しかし、改革を阻む勢力が強力で

私は一年間で退職せざるを得なかった。

予測もしない突然の退職で、私はかねてからの計画であったキャリアコンサルタントの資格を取得し、福岡のハローワークで一年働いた。

二〇〇六年、妻の故郷である出水に定住することを決断して住み着いた。二〇〇七年、南日本新聞で鹿児島大学法学部が文科省の現代GPでキャリア教育の講師を探していることを知り、手紙と履歴書を送った。

その後、面接があり採用され、十年間、鹿児島大学非常勤講師を務めることができた。

二〇〇八年、大学教授として働いていた高校時代の親友から声がかかり、東京の日本教育大学院大学の事務局長を経験した。(株)栄光が経済特区を利用して、日本の教育を変えるために、社会人経験のある教員養成大学院を開設したものである。私は共感と使命感を

抱き仕事に熱中した。同時に、伝統文化芸能の宝庫である江戸東京を満喫した。日曜日には、浅草に出かけ、浪曲、新内節文楽等を学び充実した三年間であった。また、法政大学の夜間社会人大学院のキャリアデザイン学部に入學し、修士を修得した。

さらに、広島時代、「広島KJ法研究会」の総合文化情報誌「地平線」(一九九四〜二〇〇八年)に連載してきた「戦争と平和論」を『団塊世代の戦争論』として自費出版した。究極の加害・被害体験国ニッポンとして、日本の戦争の特異性を分析し、戦争体験の思想化の大切さを訴えた。

二〇〇九年、民主党政権が誕生し、私は大きな期待を寄せたが、すぐに崩壊し、ショックを受けた。日本に健全な野党が成立し二大政党の時代が来るのはいつのことだろうか。

二〇一一年、東日本大震災が起こり、私は

東京で激しい揺れを経験した。

二〇一二年、私は出水に帰り、キャリア教育と地域活動に熱中した。

第二次安倍政権が成立していた。厚労省委託の「高校生の就職ガイダンス」登録講師として、九州、四国の高校を回った。

また、鹿児島県のハローワークの「就職支援セミナー」の講師として現在まで活動を続けている。

地域活動としては「鹿児島まちの駅」や出水市平和ガイド、戦争遺跡の会、いずみ郷土研究会等の会員として活動してきた。また、「着物で出水武家屋敷を歩こう会」を六年前から実施し、観光客の増加に貢献してきた。そして二〇一六年、共同通信社主催の第七回「地域再生大賞優秀賞」を受賞した。

この時期は、人生の終盤戦であり、アメリカを相対化し、日本の伝統文化に目覚め、退

職後様々の仕事を体験しながら、地域活動や歴史、教育に熱中した時期である。政治や天皇に強い関心を持ち始めたのも、この時期からである。

二〇一四年、集団的自衛権行使が容認され、二〇一七年アメリカにトランプ政権が誕生し、二〇一八年、米朝会談が開催され、世界は大きな変動期を迎えている。白井が「日本のアメリカ」「新国体の崩壊期」と呼んだ「失われた二〇年」後の現在は、日本人がほぼ完全にアメリカを内在化させた時期である。私の戦後史もまた、アメリカに憧れ、学び、批判し、内在化しながら、日本人として生まれた幸せを感じつつ、今日にいたっている。

四、おわりに

日本の近現代史は、まだまだ学ぶべきことがたくさんありそうだ。

私は前回、「明治六年の政変と西南戦争」

で近代日本の分岐点について触れた。明治新政府は、西郷隆盛らを弾圧することにより、フランス型の民主主義国家よりもドイツ型の中央集権国家を選択した。その結末が敗戦であり、戦後は、「自由と平和と民主主義」を理念とする「日本国憲法」に基づき、象徴天皇制を温存したアメリカ支配、従属の無意識化の過程であった。私自身の戦後史も同様な過程を経てきたことを確認してきた。

日本国憲法は、近現代の戦争と多くの犠牲者を出した結果、アメリカが自国ではとても実現できない理想を盛り込んだものである。憲法論議が盛んであるが、九条問題だけでなく、国民の権利及び義務も含め、もっと国民的レベルで議論し、憲法を血肉化するべきではなからうか。

人生一〇〇年時代を迎え、私も現在、生涯現役として、キャリア教育や地域活動に努力

している。そして、近現代史を学びなおし、七二年の人生を振り返ってきた。ごく平凡な一国民、一市民が時代の変化、大きな潮流に流されながら、全力で生きてきた事例のひとつである。

私たちが歴史を学ぶ意味は、私たちが生きている「現在」の中に「過去」と「未来」が共存しているからである。

現在をより深く理解認識するためには、どうしても過去の歴史を理解認識することが求められる。さらに未来がどうなっていくかを予測するためにも、過去現在をより深く理解しなければならぬ。

いま近現代史を学ぶ意味は、激変する世界の日本の過去、現状をより深く理解し、未来を構想するために必要不可欠な作業である。さらに、自分自身の過去・現在を理解することが、これからの人生を考えるためにも必要不

可欠な作業であると思われる。残された時間を精一杯生きていきたい。

（癒しと学びと語らいの里・ハーブガーデン花びあ（民宿・カフェ）代表、個人と地域のキャリア開発を支援する国際キャリア研究所所長）

【参考文献】

- ・「国体論 菊と星条旗」白井聡（二〇一八 集英社）

- ・「永続敗戦論―戦後日本の核心」白井聡（二〇一七 太田出版）

- ・「団塊世代の戦争論」梶原宣俊（二〇〇八 叢書見る）

- ・「吉本隆明論―戦争体験の思想」梶原宣俊（二〇〇四 新風舎）

- ・「第二の敗戦期」吉本隆明（二〇一二春秋社）

・「敗北を抱きしめて」上・下 ジョン・ダワー（岩波書店二〇〇二）

・「敗戦後論」加藤典洋（講談社 一九九六）

・「国破れてマッカーサー」西鋭夫（中公文庫 二〇〇五）

